

トヨタ財団レポート

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

ISSN 0389-1984

163 東京都新宿区西新宿2丁目1番1号
新宿三井ビル37F
Phone: 03-344-1701~3
Fax: 03-342-6911

July 1990

No.53

- 2 日本型フィランソロピーを目指して
- 3 研究助成——今年の申請状況について
- 4 朝鮮総督府調査資料に現れた文化政策の考察
- 5 韓国の研究グループを訪ねて
- 6 刊行成った3つの大作
- 7 第27回研究報告会より、他
- 8 新刊紹介、他

第55回理事会／第15回評議員会を開催

1989(平成元)年度の事業・決算報告の承認など

当財団の第55回理事会が、去る6月20日(水)都内にて開催され、1989年度の事業報告および決算報告等が行われ、原案通り承認された。

この他、評議員および研究助成等の選考委員や専門委員の選任、計画助成対象の決定が行われた。また、成果発表助成対象およびインドネシア若手研究者奨励研究助成(4月30日締切)研究助成(5月31日締切)、市民活動助成(6月20日締切)、それぞれに関する申請状況の報告もあった。

理事会に引き続き、第15回評議員会が開かれ、昨年度の事業内容や本年度の事業計画に関する報告があった後、理事・監事の選任が行われた。

なお、浅田孝氏の専務理事退任に伴い、山口日出夫理事が常務理事(兼・事務局長)に選任され、7月1日より就任した。

■市民活動助成に49件の応募

前号(本レポートNo.52)でも紹介した通り、市民活動助成については、本年度よりその内容を大幅に変更し、第1期分の公募を4月1日からこの6月20日まで行った。その結果、事前に提出された「計画概要」は66件あり、その内、実際に申請のあったものは49件であった。助成予定件数は10件程度であるため、5倍の倍率となっている。

選考は8月から9月にかけて行われ、10月上旬には第1期分の助成対象が決定される予定である。

■研究助成には742件の応募

本年4月1日より行っていた研究助成の公募については、5月31日付けをもって締め切った。総数では昨年度(771件)より30件程下回ったが、最終的な助成予定件数から見た場合、相変わらずの高倍率(約10倍)であることには変わりのない状況であると言えよう。

選考は、この7月から9月にかけて行われ、10月上旬には、助成対象が決定される運びとなっている。【3頁参照】

■インドネシア若手研究者奨励研究助成には418件の応募

本年度の同助成については、前回(424件)をやや下回る申請が寄せられた。助成予定件数は30件程度であるため、13倍を超える“狭き門”となっている。

なお、選考および助成対象の決定時期については、上記の研究助成の場合と同様。

第27回研究報告会および研究経過報告会を開催

「アラスカ発 いのちへの問いかけ——変わりゆくカリブーとエスキモーの生活——」をテーマとした第27回研究報告会を、去る5月15日(火)東京・千駄ヶ谷の日本青年館・国際ホールにて開催した。参加者は170名を超える盛況ぶり、報告および討論に熱心に耳を傾けていた。【7頁参照】

一方、昨年度の研究助成のうち、個人奨励(第I種)研究、および試行・準備(第II種)研究に関する経過報告会をそれぞれ5月11日~12日および7月15日~16日に、国際文化会館(東京・六本木)にて行った。

日本型フィランソロピーを目指して

山口日出夫 トヨタ財団常務理事・事務局長

★社会の活性化を担った助成財団

小学校の同窓会でクラスメートに会ったら、彼の友人が当財団の助成を受け、社会的に評判の高い仕事のできたので、自然に話はそこへいった。『財団の助成がなければ、あの研究はできなかったろうな。もし、資金が足りなくてしっかりしたデータが取れないと、ああいう問題は得てして政治的に利用される恐れがある。データさえあれば、ちゃんと評価もでき、論議は発展できる。十分な資金がないために、研究が変に曲げられてしまうこともある。財団の助成があって良かった。』と言ってくれた。助成があったので何の制約もなく自由に研究が行われ、研究の質も確保することができ、そしてきちんとした論議につながったというのである。

助成財団の役割としては、社会の多様性を確保する、多元主義を促進するといったことが挙げられるが、研究助成にあてはめてみるとこんなことも意味しているのだろう。社会を活性化することとは、さまざまな意見があって議論が活発な状態になることを歓迎するということになるだろうか。今の社会は〇〇反対となれば一色に塗り潰される。賛成の意見を出そうものなら非人間扱いをされる。賛成でも反対でもよい、いろんな意見が飛び交い論理的に冷静に議論が行われ、そんな中から良い選択ができたらと思う。本来論議されるべきことについて、論議がされず、ただただ不条理な力に左右されるのはよくないことである。その点、財団の助成では、自由な研究が確保でき、そういう下地がつけられるのがよいことなのであろう。

★いま、問われる個人のフィランソロピー

フィランソロピーの語源はピラントローピアである。昔読んだ『古典的ヒューマニズム・田中美知太郎他共著』の中に「ヒューマニズムの概念が…ギリシア語のピラントローピア（人類愛）から出てくる…。その具体的な意味は『親切気』という位のところかも知れないが」と記されているのをみつけた。フィランソロピーもヒューマニズムも根っこは一緒だと知ったら、フィランソロピーがずっと身近に感じられた。

いま声高に企業フィランソロピーとか企業メセナとかいわれている。フィランソロピーがヒューマニズム・人類愛・人間愛に根ざすとするなら、それはすぐれて個人の思想なり心情にかかわることである。としたら、まずこの国で問われねばならな

いのは、企業より以前に個人のフィランソロピーについてであろう。もし誰もがそのような心情を持ち合わせていたら、日本のフィランソロピーは、もう少しいろいろのよい豊かなものになっていたはずだ。それがあれば、あえて企業フィランソロピーと叫ばなくてもよかったであろう。アメリカでは独立（個人）財団の設立は、20世紀の前半であり、企業財団の多くは1950年代以降になる。また個人の寄付は83%を占め、企業のそれは4.6%に過ぎない。アメリカの企業のトップが『個人にとって他への誠意が必要なら企業も同様に他への誠意が必要です。企業も個人の集まりに過ぎないのだから』と語ってくれたのを思い出す。はじめに個人ありきなのである。

★日本の風土に適したフィランソロピーを

日本の財団をアメリカの関係者はどう見るのか、アメリカの企業財団の理解に役立つこともあると思うので紹介してみよう。

全米財団協議会の国際および公共問題担当部長トム・フォックス氏は1985年1月のFoundation Newsにこう報じている。

『アメリカの同型の財団とは異なり、ここでは、決定を下す者と決定内容は、企業から何の介入も受けない。さらに重要な点は、財団が供与する助成金はほとんど企業志向のものではないことだ。…こうした研究は財団の資金源である企業が専門にしている分野とは、なんの関係もないものなのである…。この点で、日本の企業財団はアメリカやヨーロッパの同種の財団に比べて、はるかに独立しているようだ』（村田靖子訳）

日本の企業財団は目立たないが公共的という面では努力してきたということであろう。それは日本では財団が民法34条法人（公益法人）ということにもよるが、しかし、別のところで同氏は『財団のアイデンティティ、つまりはっきりした役割を確立する必要があることは誰の目にも明らかだ』としている。いま、この忠告は生きてくるのである。

企業フィランソロピーを声高に叫ぶ人たちが一体どんなことを目指そうとしているのはよくわからないが、ただアメリカの企業フィランソロピーを目指すとしたら、アメリカと日本の風土の違いをまず理解すべきであろう。フィランソロピーとはすぐれてアメリカ社会の所産であり、その社会的条件はあまりにも日本とは違い過ぎる。

しかし、日本はこれだけの経済大国になったのだから、今後は、大きく変わらなくてははいけない。社会が大きく変わろうとしている今、トヨタ財団も改めてその役割を自覚し、これまで培ってきた力を今後十分発揮できるよう努力していきたい。

研究助成

—今年の申請状況について—

久須美雅昭 国内助成担当プログラムオフィサー

() 内は昨年度実績

	研究助成 合計	個人奨励研究 (第I種)	試行・準備研究 (第II種)	総合研究 (第III種)
申請件数	742 (771)	337 (346)	358 (358)	47 (67)
助成予定件数	55件程度	25件程度	20件程度	10件程度
申請金額 (万円)	22億8,729 (24億0,930)	5億9,756 (6億0,790)	11億6,309 (10億2,534)	5億2,664 (7億7,606)
助成予定金額	2億0,000	4,500	5,500	1億0,000

◆申請件数は昨年度なみ

本年度の申請件数は全体で742件と昨年度をやや下回ったものの、相変わらずの高い競争率となった。

1984年度以来「新しい人間社会の探究」を基本テーマとして掲げてきたが、この間申請件数は700件台ではほぼ安定している(下図参照)。1988年度より、「高度技術社会への対応」と「多文化社会への対応」を重点課題として掲げ、助成の意図をより明確に絞るようにしてきたが、これに伴う申請数の変化は微減といったところで、テーマ設定による申請数のコントロールは、なかなか難しい。

なお、毎年の申請者にはかなり新規申請の方が多くにもかかわらず、全体の申請件数に大幅な変動がないことは不思議なことである。

申請金額については、特に第II種研究につき、本年度から上限を400万円(従来300万円)に引き上げたため、それを反映して昨年度より増加している。

◆申請者の男女別

本年度から申請一覧の作成にパソコンを導入したため、各種統計の作成が容易になった。

そこで、従来統計として扱ってこなかった申請代表者の男女別について見てみた。その結果、全申請742件中、男性が605件、女性が137件で、女性が19%を占めている。研究種別ごとに見ると第I種研究での女性申請者が最も多く84件と、申請337件中の25%となっている。

ところで1986年度から89年度までの4年間の助成実績の方を見ると、第I種助成対象累計101件のうち、女性は31件で31

%を占めている。過去の申請者については男女別の統計はないので単純な比較は出来ないが、若干ではあるが女性の採択率の方が高くなっていることも予想される。

◆代表者の国籍別

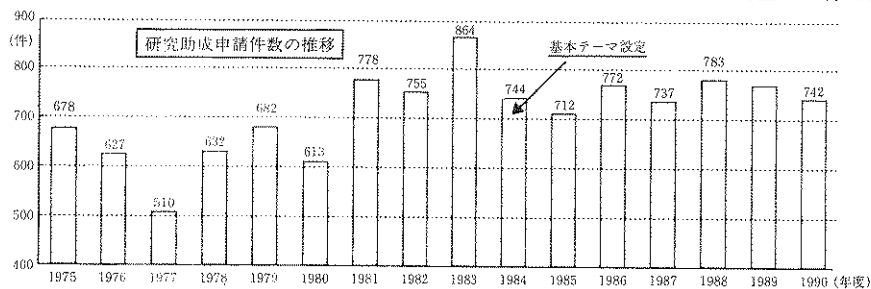
研究助成では、従来より申請者の国籍資格等を問わないため、外国人や、海外在住の日本人など、一般に研究費の得にくい立場の方からの申請が多かったが、これらを合わせた申請数は125件で全体742件のうち17%を占めている。

このうち外国人について見ると、76件で10%となる。国別では中国が32件と、とび抜けて多く、以下アメリカ9件、韓国8件、インドネシア4件、イギリス、オランダ、西ドイツ、台湾、ブラジル、ベトナム各2件、イスラエル、イタリア、オーストリア、カナダ、シンガポール、ソビエト、タイ、パキスタン、フィリピン、フランス、ブルガリア各1件と続く。

◆申請課題の特徴

申請書の整理の段階で多いと感じた課題について、あらためて「研究題目」を対象に文字列検索を試みた。その結果「仏教」「キリスト」「イスラム」などを研究題目に含む宗教関係の課題が25件あった。全体のわずか3%だが多いという印象を受けた。他には、母子または母親と子供に関するもの23件、精神医学関係のもの16件、留学生関係のもの10件などが目立ったところであった。ただし、検索上の誤差もあるので数字はあくまで参考として見ていただきたい。

多少乱暴なくくり方だが、申請課題の特徴をひとこと言え、財団が掲げた「新しい人間社会の探究」という基本テーマに対応して、「心のありよう」を問うような研究の申請が多く寄せられたと言いうことができるかもしれない。



研究助成より

朝鮮総督府調査資料に現れた文化政策の考察

崔 吉城 韓国・啓明大学校教授

●これからの日韓関係の出発点として

日帝植民地の研究は学問以外の外的な難点が多い。戦後、韓国では国づくり・独立国家の形成という理由のもと、ナショナリズムが高揚しており、その中で、“反日運動”は未だに根強く生き残っている。従って、愛国主義を脱して日本について言及すること自体が攻撃的になりやすく、日本研究の中でも特に植民地を取り扱うことは大変困難な状況にある。

一方日本側としても、被植民地だった当時の韓国あるいは日韓関係の研究は、必要以上の誤解を免れ得ないという考え方からか、慎むほうが良いと思われているようである。しかし私は、このように微妙な問題も含めて、困難であるからこそ、より深い研究が必要であると考えている。

日韓関係が政府や民間レベルでも活発になりつつあることは誠に望ましいことであるが、それは、現段階では不幸な日韓関係を真正面から認め合い、克服して超越しあった上での客観的な理解に基づいているものではない。従って、小さな問題や事件が起こるとすぐに感情的になり、日韓関係を危ういものにしてしまうことがしばしばある。私たちは真の日韓関係の出発点として植民地の史実を検討するため、1987年度以来トヨタ財団の助成を受け、「日本文化研究会」を組織して文化人類学の立場からの研究を実施中である。

●研究の視点

日本帝国時代には、植民地政策を目的に様々な政策がたてられ、実行された。

朝鮮総督府は、初めに韓国固有の土地・法律に関する調査から始め、風俗・宗教・社会・生活状態調査などを行ったが、その中から姓氏などの調査は創氏改名などに利用されたようである。

このように、調査されたものの中には、その結果を基に政策がたてられたり施行されたりして一貫していたものもあるが、施行されずに終戦によってそのまま終わったものもあった。こうした事実について、私たちは以下のような主眼をもって研究しつつある。

- ①調査資料の検討によって当時の韓国の歴史的資料化の可能性を試行する。
- ②調査—政策—施行の方法を検討して、植民地政策理念そのものを分析する。
- ③植民地政策の施行によって韓国社会がどのように変化したのかを確認する。

韓国には朝鮮総督府調査資料が歴大に残っているが、これらの資料は植民地遺産であるがために使用したくないというのが実情である。しかし、史実を取り扱う場合、感情的な問題で研究対象にできないというのはどうだろうか。私は史実を批判することによって資料化は可能であると思っている。

●日帝時代調査資料の翻訳

そこで、その前段階として歴大な資料の韓国語訳が必要であると考え、翻訳に着手し、財団の成果発表助成を得てまず『朝鮮の風水』（7頁参照）の韓国語訳を出版した。この出版と同時に読者から大きな反応があり、私たちはもちろんのこと、出版社をも驚かせているが、これは本書が植民地政府による植民地政策のた

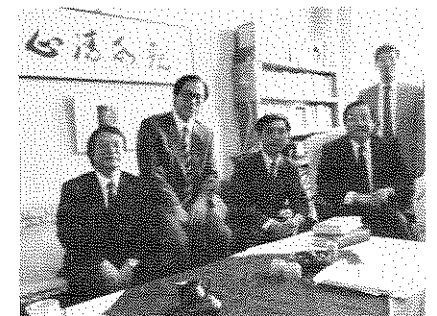
めの調査資料ではあっても、この方面での韓国人による調査資料や研究資料の欠如を補っていることを意味する。つまり、本書は韓国人の「風水」に関する伝統的な地理書として、また研究書として注目されているのである。

私は今年の4月27日に、「韓国民俗誌研究の課題と方法」を主題とした学術会議（韓国精神文化研究院・社会科学研究所主催）に参加して「日帝時代の民俗誌研究」というテーマで発表を行ったが、その時に、植民地の遺産である被害者意識を克服し、それを超越するために脱植民地主義を主張しながら、その時代の資料を客観的に分析する必要性を強調した。これについては多くの学者の賛同も得たが、植民地自体を合理化する危険性があるという声もあった。親目的だという悪口もあったが、しかし、私には学問的な必要性和研究そのものに対する愛着と信念がある。

●今後の目標

私は、学問的視覚は時代と社会実情とのずれはあり得るものであるため、研究はあくまでも学問的要求によって進められるべきものであるという信念を持っている。そのためには、まず朝鮮総督府が刊行した調査資料を少なくとも10巻以上は翻訳して、その基礎をつくりたい。当面は、『朝鮮の風水』に続いて『朝鮮の類似宗教』（啓明大学校出版部から今秋発行

▼崔教授(右から2人目)と研究チーム



予定)、および『朝鮮の鬼神』(魯成煥・蔚山大学校教授/日本文化研究会メンバーによる翻訳書で今年中に民音社から出版予定)の2冊の刊行を目指している。

一方、植民地時代の研究として、現地調査も行っている。日帝植民地時代の研究は、これまで独立運動史的に多少なされているが、村落レベルでの社会変動に注目した研究は全くない。従って現在、是非を問わず、植民地化によって韓国の村落はどのように変化したのかを、典型的な日本漁民による開拓村であった全羅南道の巨文島において現地調査中であり、朝鮮総督府による農村振興運動や儀礼準則などによる村落レベルの変化と、最近の韓国政府によって行われたセマウル(新しい村)運動や家庭儀礼準則との比較も試みたいと考えている。

韓国の研究グループを訪ねて

山岡義典 プログラムディレクター

●日韓友好の真の基礎確立のために

今、日韓関係は新しい時代を迎えようとしている。しかし両国民の真の友好を築いていくためには、次の二つの努力が不可欠のように私は思う。

一つは日本植民地時代35年の歴史像を少しでも共有する努力、もう一つはその歴史の所産でもある在日の韓国・朝鮮人の実状を理解する努力だ。このためにはイデオロギーや感情にとらわれない事実認識がまず必要で、堅実な歴史研究や社会調査が欠かせない。しかし、現実にはそのいずれもが困難な状況が長く続いていた。

日韓の研究者がそのようなテーマに取

り組み始めたのはごく最近のことである。そして私たちの財団でも、数年前からそのような先駆的な試みに助成させていただいている。この4月に私は韓国を訪問し、それらの研究者にインタビューを行った。

●「日帝時代」の意味を問う

日本植民地下の35年(1910~1945年)を韓国では「日帝時代」という。この言葉は一つの時代の呼び名として、ごく普通に使われている。しかし最初にこの文字を見る日本人は、一瞬ドキッとしてある種の目をそむけたくなる感覚を覚えるに違いない。時代の呼称ひとつとっても、韓国と日本とはほとんど共通感覚を持ち得ていないのが実状だろう。

さて、今回この日帝時代を研究している二つのチームにお会いした。一つは左頁に寄稿いただいた崔吉城教授グループだが、これについては重複するので割愛する。もう一つはソウル大学校経済学科の安秉直教授を中心とするグループである。京都大学の中村哲教授を代表とする「韓国近代経済史研究会」の韓国側グループに当たる。訪問したのは大学に近接する私的な研究室。膨大な資・史料をコピーしたファイルが、部屋の四周に積み上げられていた。

この研究は、NIES(新興工業地域)の代表国になった韓国の経済発展の要因を、李朝末期から現在に至る歴史の中を探ろうとするものだ。研究の中心となるのは植民地時代。その時期の工業化の最先地域であった京畿道と、地主制度が強固に残存した忠清道を対象に一次史料を収集し、日韓両国の研究者がペアになってそれぞれのテーマを追究する。

助成初年度の1988年8月には予備研究の成果をもち寄って4日間にわたるシン



▲刊行された2冊の研究成果

ポジウムを開催した。その内容は日韓両国で編集され、昨年11月には韓国版が、この5月には日本版が出版になった(7頁参照)。史料も方法も成果も、すべてを両国の研究者が対等に共有しようとする、これがこの研究の特徴だ。

●在日韓国朝鮮人の生活・文化・健康

ソウル大学校では保健大学院の金正根教授チームも訪問した。金教授等は1986年度の子備研究で日本の研究者と共同し、韓国に住む韓国人と日本に住む韓国人の疾病類型や死因について比較調査し、生活環境が健康に及ぼす影響について考察した(この報告書については本レポートNo.50を参照)。

1989年度からはこれをさらに発展させ在日韓国朝鮮人の健康問題の実態を保健行動や生活文化とも絡めて把握する予定だ。韓国に住む韓国人、日本に住む日本人とも比較することにより、在日の人々の健康問題に関する文化的要因と環境的要因も明らかにしたいと意欲的である。

韓国から帰ってしばらくして個人奨励(第I種)研究の経過報告会が開かれ、日本留学中の鄭鎮星さんから「在日三世」の意識と文化運動に関する研究の進行状況を聞いた。韓国人自らの手によって、在日の人々の実態や課題が探究されていくことの意義の大きいことを痛感した。

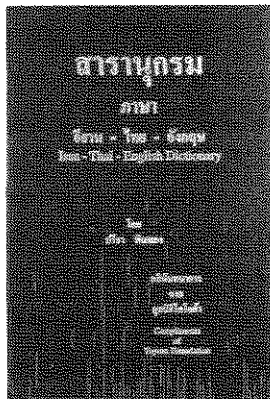
私ども民間の助成金が一助になることを喜ぶたい。

刊行成った3つの大作

—国際助成の成果物より—

牧田東一 国際助成担当プログラムオフィサー

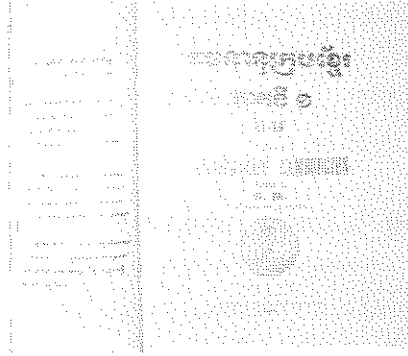
言語は、その言葉が話されている国あるいは地方の文化的要の役割を果たしている。そうした言語の辞典の編纂や出版に対して国際助成では、これまでに数件の助成を行ってきているが、1989年度には、助成対象のうちの2件、『東北タイ語辞典』と『クメール語大辞典』が出版の運びとなった。



◎『東北タイ語辞典』

『東北タイ語辞典』(写真上)は元仏教僧であり、タイ語、ラオ語、東北タイ語、パリー語、サンスクリット語の学者であるブリーチャ・ピントン博士が20年以上の歳月をかけて編纂した東北タイ語—英語辞典である。辞典の内容は、各単語の発音、中央(標準)タイ語による語義、英語による用語解、語源、そして東北タイ文学からの引用文である。この辞典はその内容の広さ、深さにおいて、これまでの同類の辞典をはるかに凌ぐものである。また、辞典の英語の部分については、タイ語とラオ語の専門家であり長年ナコン・パノムに住むアメリカ人言語学者サミュエル・マテックスが共同研究者として担当した。1987年度の国際助成

により、データのコンピュータ入力印刷が行われ、1989年に出版された。



◎『クメール語大辞典』

もう一つの『クメール語大辞典』(写真上)については、その復刻版の再版を目的としたプロジェクトへの助成であった。この辞典は、カンボジアの仏教研究所が編纂し、1938年に初版が出版された非常に権威あるカンボジア国語辞典である。カンボジアではもはや入手できなくなった同辞典を復刻するために、1983年に日本で「カンボジア仏書復刊救援会」が組織され、1967年版が復刻され、2000部印刷されてカンボジアに寄贈された。

しかし、長期にわたった内戦を乗り越え国の再建に全力を注ぐカンボジアでは、すでに寄贈された辞典だけでは全く足りない状況にあり、そこで1990年2月に、さらに2000部が曹洞宗ボランティア会を中心としたグループにより復刻版が再版され、カンボジアに向けて積荷された。この新たな2000部の印刷、そしてカンボジアへの運送に対して、立正佼成会と当財団(1989年度の国際助成)が共同で助成を行った。この辞典のカンボジアへの寄贈については、1990年3月12日付の日本経済新聞で、文化の援助は、時に巨額の経済援助にも勝ることがあるケースとして取り上げられた。

◎『ベトナム銅鼓図録』

ドンソン銅鼓(鼓の形をした銅製の考

古学遺物)は、北部ベトナムの紅河中流を中心に中国雲南省にまたがって発見される古代文明の遺物である。銅鼓の発見地に因んで、ドンソン文化と呼ばれるこの古代文明は、紀元前3000年から紀元前500年くらいの間に、ベト族(現代のベトナムの主要民族)の祖先に当たる人々がつくり上げた青銅器文明と考えられている。本書はベトナム社会科学委員会考古学研究所の編纂により、同研究所が1987年に刊行した『ドンソン銅鼓』の図録編に相当する。ベトナムでは良質の印刷が困難なため、1985年度と88年度の国際助成を受けて、本書は日本で印刷・出版された。本図録には、1988年までにベトナムで発見された銅鼓144点全ての写真と文様スケッチ、発見地・現在の所蔵機関等の関連情報が収録されている。本書の刊行により、ベトナムから発掘された現存する全ての銅鼓について、世界中の学者が情報を共有することが可能となり、ドンソン銅鼓の国際的な研究の発展に資することが期待される。

DONG SON DRUMS IN VIET NAM



(『ベトナム銅鼓図録』六興出版・刊。
本文：英語・ベトナム語、日本語解説付)

第27回研究報告会より

開発の危機にさらされる カリブーとエスキモーの生活

「アラスカ発 いのちへの問いかけ—
変わりゆくカリブーとエスキモーの生活—」
をテーマとした第27回研究報告会が、
5月15日、朝日新聞社とオリンパス光学
工業(株)の後援も得て行われた。

この報告会では、写真家の登龍門とし
て名高い『木村伊兵衛写真賞』をこの4
月に受賞したばかりの星野道夫さんによ
るスライドを用いた研究報告「ファイ
ンダーをとおして見たアラスカの自然・動
物そして人間」が先ず最初に行われた。

これは、1985・87年度の2度にわたる
当財団の助成による彼の研究成果をもと
にしたものである。その目的は、北極圏
最大と言われるアラスカ油田の開発が、
カリブーの移動や生態にどのような影響
を及ぼし、また、原住民としてのエスキ
モーなどの生活にどのような変化をもた
らすのかを、現地で彼等とともに生活し

ながら観察しカメ
ラで記録すること
にある。

報告では、アラ
スカの北極圏国立
野生生物保護地の
中の、特に1002と
呼ばれるカリブーにとっても生息するう
えで極めて貴重な地域が、油田開発の危
機にあると同時に、カリブーにその生活
を依存してきたエスキモーの村の将来も
危ぶまれること、また、風化しつつある
「カリブーフェンス」の早急な記録が必
要であること、などが感動的で迫力ある
写真とともに熱っぽく語られた。

つづくトーク・インでは、「侵されゆく
自然といのちをみつめて」と題し、女子
栄養大学の小原秀雄教授とお茶の水女子
大学の原ひろ子教授が、星野さんを交え
ながら、それぞれケニアおよびカナダ北
部でのフィールド体験に基づく話などを
もとに、自然保護と開発の相互関係の難
しさなどに言及し、会場との活発な質疑
応答もなされた。 (渡辺・記)



▲氷原を行くカリブーの親子(撮影・星野道夫氏)

新刊紹介

『近代朝鮮の経済構造』

安秉直、李大根、中村哲、梶村秀樹・編
比峰出版・刊('89.11)

A5判 520頁 9,000ウォン

『朝鮮近代の経済構造』

中村哲、梶村秀樹、安秉直、李大根・編
日本評論社・刊('90.5)

A5判 447頁 6,000円(税込)

現在、財団の研究助成によって日韓共
同の「韓国経済発展に関する歴史的研究」
が進められているが、1988年8月には初
年度の成果を持ち寄って4日間にわたる
シンポジウムが開催された。その報告論
文を加筆・改訂し、日韓両国でそれぞれ
の言葉で編集・出版したのがこの2冊で
ある(5頁参照)。

第1編「土地政策・農村経済構造の再
照明」、第2編「植民地化前後の商品流通
構造の変動」、第3編「『工業化』に伴う
社会変動と解放後への展望」より構成さ
れ、李朝末から植民地下の時代にかけて
の朝鮮経済発展の構造を、緻密な実証と
論理によって部門別に論じている。なお
日本版の出版は当財団の成果発表助成に
よる。

『韓国の風水』

村山智順・著、崔吉城・訳
民音社(韓国)・刊('90.3)

A5判 704頁 12,000ウォン

朝鮮総督府中枢院の研究嘱託であった
村山智順は、朝鮮の民間信仰に関する多
数の調査報告をまとめている。これらは
植民地統治を目的としたものであること
と日本語で書かれていることから、これ
までほとんど韓国で利用されることはな
かった。崔吉城氏は、冷静な批判・分析
によってこれらの調査資料が現在の韓国
文化の理解に役立つものと判断し、それ
らを解題つきで韓国語に翻訳し出版する

努力を続けている(4頁参照)。

本書はその最初に翻訳出版されたもので、1931年に発行された『朝鮮の風水』の韓国語訳。第1編「朝鮮の風水」では風水師たちの理論や方法を論じ、第2編「墓地風水」と第3編「住居風水」では歴史文献資料と現地の調査資料を整理している。当時の景観や風俗を知る貴重な写真や風水の考え方を示す概念図などもそのまま複製されて興味深い。1987年度研究助成の一環として翻訳し、成果発表助成によって出版。

『資料・戦後日本の経済政策構想』
(全三巻)
有沢広巳・監修、中村隆英・編
東京大学出版会・刊('90.5)
A5判、各300,250,466頁
セット価格25,750円(税込)

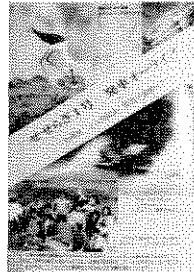
有沢広巳、稲葉秀三、大来佐武郎、中川幸次等は、終戦直後から日本の戦後経済復興策に取り組み、その政策はその後の経済復興に大きな影響を及ぼした。本書はこれら4氏の所蔵資料に基づいて、3つの重要な政策立案過程資料を整理し、必要な注を加え、解題をほどこしたものである。

第1巻は1945年秋から外務省特別委員会によって始められた「日本経済再建の基本問題」の策定過程とその改訂に至る資料を、第2巻は1946年秋に始まる外務省石炭委員会のいわゆる「傾斜生産方式」立案に関する資料を、第3巻は1948年初頭と翌年5月に経済安定本部で作成された「経済復興研究会」の関連資料を収録している。全体の解説を中村隆英が、各

巻の解題をそれぞれ大森とく子、宮崎正康、原朗が執筆している。調査と編集作業の一部は当財団の研究助成と成果発表助成によっている。

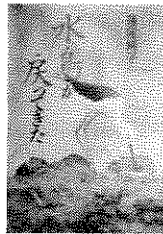
『せせらぎ1号 発車オーライ！
一台所発 ドブ川経由 野鳥の楽園行きー』
行徳野鳥観察会友の会・編著
同会・刊('90.3)
四六判 228頁 (頒布価格1,000円)

第4回研究コンクールで最優秀賞を獲得した研究報告書を再執筆して編集したもの。ドブ川の浄化とその導水による野鳥保護区の環境改善の3年にわたる実験過程を、詳細な観察・分析データも含めてまとめている。市民科学の典型的な事例報告書として多くのグループの参考となる。 (連絡先☎0473-96-2503・鈴木方「友の会」まで)



『水鳥が戻ってきた』
蓮尾純子・著
NTT出版・刊('90.5)
四六判 208頁 1,340円(税込)

上記『せせらぎ1号……』の研究過程を、会のメンバーの一員である著者が一般読者向けに書き下ろしたもの。生き生きとした筆致で、参加者行動や野鳥と人間の交流を描いており、ドキュメントとしても面白く読める。



受賞おめでとうございます！

当財団助成による下記の研究成果がそれぞれの世界で高く評価され、受賞にいたりました。心からお慶び申し上げます。



- ♣ 「第11回日本出版学会賞」に、井上輝子・女性雑誌研究会・著による『女性雑誌を解読する』(著作については本レポートNo.51を参照)
- ♣ 1989年度奨励報文賞(日本科学技術連盟)に、宮城雅子・『人的要因INCIDENTの分析手法の開発とその実証』(この基になった出版物については本レポートNo.45を参照)

編集後記

- ▶最近、マスコミなどでフィランソロピーという言葉を目にする機会が度々あるが、その用い方には些か違和感をもつ。
- ▶というも、その言葉の“頭”に必ずといって良いほど“企業の”という3文字がつくからだ。
- ▶これは、フィランソロピーを企業の社会的貢献活動としてとらえようとするためであろうが、そもそも、“人類愛”を意味するそれは、企業活動より以前に、私たち人間一人一人の生き方に根ざしたものと心得る。
- ▶したがって、フィランソロピーにもとづく活動は、時として所謂“国益”や“企業益”とは相反することもあり得るわけで、この辺を取り違えると、またまた“国際的な笑い者”になりかねない。

トヨタ財団レポート No.53

このレポートを継続してご希望の方は、お葉書にて財団宛お申込みください。

発行日 1990年7月25日
発行所 財団法人 トヨタ財団
発行人 山口日出夫
編集者 渡辺 元
印刷 真友工芸株式会社